



「研修便り」は、高知市立学校教職員研修の成果・内容の共有、教育研究所から発信する情報の周知を目的として、発行していきます。

## 令和3年度 高知市教育研究所 研究員制度

研究員制度は、教育研究所設立以来引き継がれている伝統ある事業の一つで、本年度68年目を迎えております。

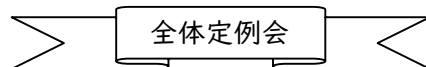
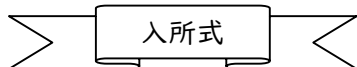
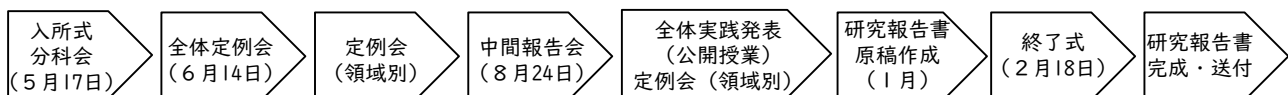


「研究員制度」とは、教職員が研究員として学校等で実践しながら教育課程や学習指導法、学校・学級経営などについて研究を深め、その研究の成果を高知市全体に普及し、学校教育の振興・充実に資することを目的に、高知市教育研究所が行っている研究制度です。

### 今年度の研究員・研究テーマと1年間の研究の流れ

【令和3年6月28日現在】

研究員 【敬称略】	所属	研究領域	研究テーマ
合野 友成	長浜小	教育相談	不登校支援に関する教職員の意識・対応力を高める組織的対応
横田 千穂	城北中		「出会い」をもとに学ぶ意欲を育てる校内型適応指導教室の在り方
竹内 ひかり	朝倉小	特別支援教育	児童が主体的に活動に取り組める生活単元学習
山崎 優子	朝倉第二小		多動・衝動性のある児童が自ら参加できる授業を目指して －授業のモジュール化の試み－
畠山 佳之	潮江南小	授業研究	言語活動で思考の深化・変容を表現し合う算数授業
植田 歩依	青柳中		リズム感を身に付ける，リズムカードを用いた帯活動の実践
坂本 奈津子	西部中		課題に対して根拠をもとに表現できる生徒の育成のための方策
戸田 正倫	神田小	情報教育	自己表現力を育てるGIGAタブレットを用いた授業づくり
植木 恵	鴨田小	人権教育	クラス会議を通して発達課題を抱えた子どもたちの自己有用感を高める
原田 知永子			
大塚 裕介	第四小	学校事務	組織的なICT活用状況の向上を目指したモデルづくり
宮本 空実	旭小		



5月17日に行われた入所式では、今年度の研究員12名に山本 正篤 教育長から辞令書が交付されました。そして、研究員を代表して、戸田 正倫 教諭（神田小）から「令和の時代における新しい学校像として、GIGAスクール構想が提唱されました。私は、タブレット端末の授業での活用について実践研究を積み重ね、加速度的に変化し続ける社会に対応していくために、受動的ではなく能動的に学ぶ子どもたちの育成につながればと考えております。」と挨拶されました。

入所式に続いて行われた学習会では、刈谷 三郎 名誉教授（高知大学）に、研究が充実したものになるよう、教育実践論文作成ための心得をご指導いただき、研究員12名の1年間の研究が始まりました。

6月14日に行われた全体定例会では、刈谷 三郎 名誉教授から研究を進めていく上でのポイントが示されました。

- 実践する過程の中で、どのようなことが起こって、どのような結果が導き出されるのかというところを考える。  
(プロセス・プロダクト研究)
- 三つのキーワードを選び出して研究テーマに落とし込む。
- 三つのキーワードの定義づけがきちりしていないといい論文は書けない。



また、「アウトプットする力と論文の力は異なるものなので、プレゼンの能力も身に付けてほしい」との言葉もありました。

対象：高知市立小・中・義務教育学校 道徳教育推進教師及び参加希望教職員



【講義・演習】「道徳科における『主体的・対話的で深い学び』とその評価」

講師：文部科学省初等中等教育局教育課程課 浅見 哲也 教科調査官

概要

道徳教育の推進や道徳科の充実について、「カリキュラム・マネジメント」「補充・深化・統合」「指導と評価の一体化」それぞれのキーワードから学びました。また、道徳科における効果的なICT活用や評価に関わる具体例の紹介、授業づくりの演習も行われました。

## I 道徳科における「主体的・対話的で深い学び」

### 「主体的・対話的で深い学び」

道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習

- 問題意識をもつ
- 自分との関わりの中で考える
- 多面的・多角的に考える
- 自らを振り返る
- 自己の生き方についての考えを深める



主体的な学び

真剣に考え、自分の考えを表現する

対話的な学び

共に語り合い、視野を広げて考える

深い学び

自己の生き方についての考えを深める

## II 道徳科の指導と評価の一体化

### 道徳科における評価

成長を受け止めて認め、励ます**個人内評価**

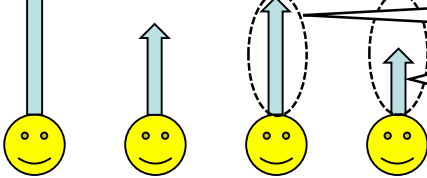
道徳的価値の理解を基に、道徳性の様相を育てること

評価規準はなく、達成度は評価できない

数値で評価するものではないだね。



### 道徳科の授業のねらい



どこまで到達したかを評価するのではなく、**どのように学んだかを評価する**

### 道徳科における評価の意義

ねらい：道徳性を養うこと

教師

児童生徒

教師の指導の明確な意図が必要  
・ 指導の方向性  
・ どのようなことを考えさせ、どのようなことに気付かせたいのか

自らの成長を実感し  
意欲の向上につなげていくもの

指導に生かされ、児童生徒の成長につながる評価

### 指導と評価の一体化

### ～記述による評価の一例～

通知表のねらいは、子どもを認め、励ますこと。指導要録は、1年間の成長の様子を具体的な姿も交えて記述し、次の学年の指導に生かせるようにすることが大切。

【その1】

「二通の手紙」では、他者への思いやりと規則を守ることのどちらが大切なのかを比べて考えながらも、自分の体験を想起しながら、規則に込められた思いについて考えを深めていました。

【短所】一つの授業の評価であり、成長の様子が感じ取りづらい

【長所】保護者にとって**子どもの学習状況がイメージしやすい**

指導要録には反映しづらい

でも…何だかちょっと**あったかい**  
**勇気づけられる**

【その2】

常に自分に厳しい目をもって、授業では自分を振り返り、反省するような考えも観られました。しかし、それは、今の自分はこうあるべきという自分をしっかり捉えている表れであり、これからの道徳科の授業で、どんな自分をつくりあげていくのか、とても楽しみにしています。

### 【受講者の感想】

何をやっても道徳だが、何から手をつければよいか分かりにくいのも道徳教育なので、分かりやすく推進することが大切であるというのを学んだ。道徳科の授業では、白黒つけられないグレーゾーンを話し合っている。つまり、答えが一つではない。道徳的な課題を一人一人の児童生徒が自分自身の問題と捉え、向き合うことが大切であり、「考え・議論する道徳」の実現が、道徳性の育成のみならず、資質・能力の三つの柱の育成にもつながるということを実感できた。

ご意見・ご感想を高知市教育研究所 教職員研修班までお寄せください。